

視察先別報告 東ティモール

【青年海外協力隊】

番組制作隊員活動視察

概要

国営ラジオテレビ局は、社会への情報伝達の中心的な役割を担っているが、十分な経験や技術の蓄積がないことから、製作される番組の質の向上が求められている。青年海外協力隊は放送局内のニュースオフィスにおける、オーディオビジュアル、カメラ操作への助言・指導、ニュース番組の制作、ライブイベントや収録などのサポートをとおして、放送番組の改善を目指す。

01

大浦 正人 社会の中で放送局は情報伝達の中心的な役割を担っており、放送番組の改善は重要です。そのためには、番組制作に携わるスタッフの育成が必要ですが、放送局職員の向上心は、それ程高くない様子でした。又、日本では考えられないような放送機材しかないようでした。そんな中で、赴任してわずか6カ月の青年海外協力隊の門上さんは、その現実に臆する事無く、現地職員を巻き込み、必死に工夫して番組制作に取り組んでおり、その姿に感動しました。身体全体から、そして言葉の端々から熱が発せられ、周囲を圧倒している様子を間近で感じる事が出来ました。

02

太田原 奈都乃 国営ラジオテレビは、情報伝達の中心的な役割を担う。およそ15人の記者が政府機関や街に赴き取材をし、毎晩1時間のニュース番組を放送する。だが国営番組は人々を惹きつけず、インドネシアやポルトガルなど他国からのテレビ番組の視聴が主であると聞いた時、私はその存在意義に疑問を持った。しかし門上隊員の子どもに焦点を当てた教育番組を知った。これはKURIOZA（現地語で 好奇心の固まり という意）という名の人形が社会の現場に足を運び、多様な発見をする番組だ。「重要なことは『何をどう伝えるか』。創意工夫で最大限に面白いものをつくりたい。」と、限られたリソースの中で、身のまわりの社会を興味深く伝えていた。東ティモールの可能性、そして子どもの将来を大きく広げる希望に満ちた場所だと感じた。

03

川辺 絵梨 現地では、「国営放送はつまらないからニュースしか見ない」という人が多いようだ。「ただ伝えるだけでなく、面白くしたい！」と門上隊員は熱く語ってくださった。日本ではテレビ局でディレクターをされていたが、現地ではその枠を超え全ての作業を自分でやっている。「子供番組の制作では、街で買ってきた青い布をブルーバックにし、合成素材の撮影をしている」とのこと。機材が十分でない状況でも、手間暇を掛けて工夫すればいろいろできることを実践させている。門上隊員の熱い語り口はとても魅力的で、お話を伺っただけで私は何か面白そう！とワクワクした。きっと現地ラジオテレビ局のスタッフも門上隊員の活動に引き込まれ、共に経験する中で技術や番組制作の楽しさが伝わると確信した。

04

木村 みゆき 東ティモール唯一の国営テレビ局ですが政府のプライオリティが低い中で、門上晋一郎隊員は「あるものを工夫して最大限生かす事、メディアは本当の情報を伝える事と面白く伝える事の両方が大切だと伝えたい」と子供番組の制作に取り組んでおられました。大胆かつ繊細、シンプルかつ明確。国際協力の現場での協調も合わせ、開発途中の国に情熱を持って携わる姿勢に感銘を受けました。

05

後藤 恵美 「小さくて設備が少ない中でもできることはある」ということを同僚たちに伝えたいという門上隊員の熱い想いと、限られた予算・技術を駆使して魅力的な番組作りを実現している行動力に感銘を受けた。また、「ただ伝えるだけでなく、面白く伝えることが大切」という姿勢にも強い共感を覚えた。門上隊員は職場の休職制度を利用して東ティモールで活躍されているとのこと。派遣先での限られた予算・技術・設備の中で創意工夫を凝らし活動してきた人材が再び日本企業に戻って活躍できることは、日本の企業・社会にとっても大きな収穫に違いない。このような休職参加制度がより多くの企業に拡大することを願ってやまない。

The Democratic Republic of Timor-Leste

06

塩澄 志麻

東ティモールでは、郵便のシステムやネットの環境が整備されていない。この国営ラジオテレビ局は、紛争時に破壊された後、しばらくの間はラジオ局として使用されてきた。今では、国内13県すべてで国営ラジオテレビにアクセスすることができる。

設備は整っていないが、「あるもので最大限の効果を。そして、テレビの質を高める」と日本の技術をそのまま伝えるのではなく、東ティモールのことを理解したうえで、提案し一緒に番組を制作している門上隊員。これが、日本の地味ではあるが、独特の支援であると感じた。

07

武田 義久

建物自体は、1992年にインドネシアによって建てられ、1999年の独立時の紛争で破壊されたが、その後、国際連合などによって再建された。日本の農業や建設、教育などのODAの支援状況を、ここから放送し、東ティモールの市民に日本のODAの情報を提供している。現在、ニュースの視聴率が一番高く、ディリ市内はTVの普及率は高いようだ。ポルトガル語とテトゥン語の2か国語での放送をしているが、多言語が混在している難しさを感じた。門上隊員は「日本では当たり前のことが、こちらでは珍しく、番組を作成するための創造性が大切であり、あるもので創意工夫していくことが必要です」と生き生きとした表情で、私たちに話してくれた。また、身近な素材で教育番組を制作することで、東ティモールの子供たちの未来や夢を実現することを考えていると感じた。今後、ポジティブ思考を変えずに進んでもらえたらと思った。

08

田中 香織

門上隊員は日本のメディアで培った専門性を活かし、単なる技術だけではなく仕事に誇りを持つ楽しさを同僚たちに伝えているように感じた。日本と比べると不足だらけな環境のはずだが、「小さくても出来ることがあることを示したい」と創造性を最大限発揮され、「ただ伝えるのではなく、どう興味を引くか」と伝えることにこだわり抜く姿は本当に素敵だった。門上隊員が制作された番組は水工場を題材とした子ども向けの教育番組で、なかなか生活場所以外の世界を知る機会の少ない東ティモールの子どもたちが、身近なものから興味を広げられるようにという願いのこもった温かい番組だった。現在は、国営テレビ局では午後5時から10時までの5時間の放送分（ニュース番組、討論番組及び音楽番組）しか制作していないそうだが、今後は東ティモールの人々が東ティモールだからこそ伝えられる番組が増えてほしいと感じた。

09

藤島 誠人

東ティモールでは国営ラジオテレビが唯一のテレビ会社である。そのため、このテレビでの情報が国民の情報源になる。このプロジェクトでは、情報を素早く正しく国民に伝えることをモットーにしている。その為か特にニュースの視聴率が高いことが分かった。多くの国民がニュースだけは、国営ラジオテレビのチャンネルを見るそうで、他の時間帯についてはインドネシアのチャンネルを見る人が多いようだ。ここに派遣されている隊員は東ティモール国民に支持されるように面白い番組制作をするように心がけているとのこと。日本にあるような良い機材を使うのではなく、国内にある物でできるように考えていた。今は、国民の5割を占める子どもたちをターゲットにして、子ども向け番組を制作している。この制作でも、正しい情報を正確に面白く伝えることを心がけていた。

10

藤岡 裕巳

唯一のテレビ局であり、中心となって情報を発信していくその役割は非常に重要であると感じた。放送内容は、ニュース・ディベート・ドキュメンタリー・音楽・料理などであるが、そこに教育番組の放送を入れようと制作に励んでいた。新聞では文字が読めない人がいる、ネットでの情報収集には多額のお金がかかる。テレビは耳で聴いて目で視覚的に情報を得ることができるツールなので、是非たくさん子どもたちに教育番組を見てもらい、テレビが学びの場となるよう教育番組が定着することを願いたい。門上隊員の言葉で非常に印象的であったのは「日本のような高価な機材がなくても、目の前にある限られた機材でも工夫次第で様々なことができることを現地スタッフに示したい」という言葉。私の職業（教員）にも通じる言葉であると深く感銘を受けた。